

シネマをいろいろと病と医療-2

アルツハイマー病に奪われた妻 生き続ける愛

映画・医療ライター 小^こ守^{もり}ケイ

「言葉は思考よ。言葉を使って、自由、幸福、愛の小説を書くわ」。輝くばかりに若いアイリスが自分の将来の夢を語る。自転車で野山を駆け巡り、川に飛び込んで泳ぐ。オックスフォード大学の講師時代、ジョンは彼女に一目惚れする。

続いて晩年のある日、「現代の偉大な哲学者で文学者」と紹介されて、アイリスがTVに登場し、言葉の重要性について語り始める。ところが途中で言葉に詰まって、放送中に立ち往生してしまう。ジョンは彼女を心配そうに見守る。

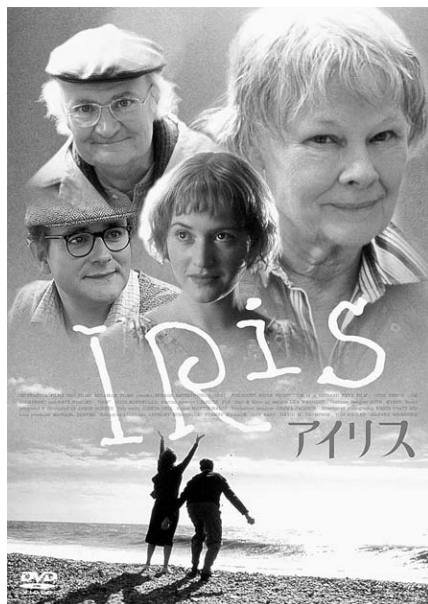
映画「アイリス」は、イギリスが生んだ世界的な作家・哲学者アイリス・マードック（1919～99）の伝記映画。夫の文芸評論家ジョン・ベイリーの「作家が過

去を失う時—アイリスとの別れ」を原作として、夫婦が生きた40余年を、過去と現在を交互に映すテンポ良いフラッシュバック手法で描き出した作品だ。老若アイリスに扮するのは二人の英国トップ女優で、老アイリス役のJ・デンチ（「007」シリーズのボンドの上司「M」役でもお馴染みの大女優）と、若いアイリス役のK・ウィンスレット（「タイタニック」のヒロイン役）が対比的な姿を見事に演じている。

まさか妻に限って…

夫婦に異変が起きるのは、アイリスが70歳を過ぎた頃。「スペルを忘れちゃって、書くのが億劫になってきたわ」と言ううちに、生活用品の名前が出ない、毎日TVに出てくる首相の名前を忘れる、出かければ「何で外出したんだっけ」。夫婦は「年のせい」と済ましているが、かかりつけの家庭医の眼には自然な衰えには見えない。アルツハイマー病が原因の認知症を疑って、脳検査を受けさせるよう勧める。しかしジョンは、「まさか妻に限って…」と取り合わない。

実際、アルツハイマー病の初期、すなわち、第1（健忘）期は、よくある“物忘れ”と似ているため、病気を認識しにくい。周りの人が「少し変だな…」と気付くのは、病気がやや進行し、第2（混乱）期の症状の字が書けない、人や物の名前が言えない、物や文字が何を意味するのかが分からない、トイレや入浴、着替えができないなどが現れ始める頃。ジョンがアイリスを専門医に受診させるのも、その頃だ。



「アイリス」発売・販売元：松竹株式会社ビデオ事業室
©MMI Fox Iris Productions Limited, Intermedia Film
Equities Limited and BBC Films All Rights Reserved.
上：晩年のアイリス（右）とジョン（左）
下：若き日の二人

映画「アイリス」

リチャード・エア 脚本・監督、2001年、英国

記憶の中核「海馬」が萎縮

検査の結果、アイリスは、脳のMRIでは記憶の中核である海馬が萎縮していて、脳と頭蓋との間に隙間ができていることが判明。また、絵を示して物の名前を言わせる痴呆テストでは、「歯ブラシ」は言えるが、スプーンには「食べるための道具」。動物という意味のアニマルという言葉は忘れ、ドッグ（犬）をゴッド（神）と答える。アルツハイマー病と診断されると、この時は理解でき、悲しげに「治らない病気なのね」と応じる。

アルツハイマー病は、誰でもなる可能性がある脳の病気。脳神経細胞にβアミロイドという異常蛋白が増えることにより細胞機能が低下し、判断力の低下や記憶障害、さらに進行すると人格の変容も起こし、10年ほどで死に至る。近年は、初期ならば進行を遅らせる薬や、βアミロイドを取り除く薬が開発されているが、未だに根本的な治療法が確立していない不治の病気だ。

進行を遅らせようとするが……

夫婦は現実を受け入れるしかない。ジョンはアイリスの気持ちを安定させ、病気の進行を遅らせようと親友に会わせたり、思い出の場所に連れて行ったり、寄り添って暮らす。しかし、ある冬の日、一瞬眼を離した隙に着の身着のままで徘徊。「君は悪くない。僕が悪いんだ」ジョンは自分を責める。アイリスは無表情。

やがて、場面は尿や便の失禁、拒食、痙攣を起こし、最後には寝たきりで死亡する第3（臥床）期へ。老アイリス役のJ・デンチの演技が圧倒的だ。乱雑で足の踏み場もない家の中、アイリスは何も認知できない。眼は遠くを見ていて空中を泳ぐ。歩き方や仕草、汚い服の袖や襟、髪や爪…。この病気の特徴である人格変化も現れ、ジョンに対しても怯えたり、掴みかかったり。専門施設へ入院。死去。79歳。

病気への偏見を消す美しい映像

アルツハイマー病の映画ではあるが、決してお涙頂戴ではない。若いアイリスが踊るように川の中を泳ぐ冒頭シーンでも分るように、美しい画面に見とれているうちに話が進む、とても観やすい映画だ。それは、全篇が自由な人生を切り開こうとする、若き日のアイリスの意欲的な姿勢で貫かれているから。ジョンがアイリスを愛し続けるのも、そんな彼女の生き方に敬意を抱いていたからであろう。品格のある映画で、観る者に勇気を与え、アルツハイマー病への偏見を打ち消してくれる。

監修：東京通信病院 内科部長 みや ざき しげる 宮 崎 滋

